

# 昼休みも／4年生から全校に／1年生ペア特訓

## 一輪車講習会、岐阜県の黒川小・東白川小、長野県の南相木小で

ベルマーク財団のへき地支援ソフト事業、一輪車講習会が、コロナ禍に配慮した安全対策をとりながら3校で実施されました。

11月29日は岐阜県の白川町立黒川小学校。今年度3回目の講習会です。県中南部の山あいにある、児童数56人の学校です。講師は日本一輪車協会の公認インストラクター、佐藤彩香さんと高田朝日さん。世界大会などの優勝経験がある第一人者です。

模範演技の後、2学年ずつに分かれ、給食をはさんでみんなで練習しました。「姿勢はまっすぐ!」「足元を見ないで!」とアドバイスの声がかかります。

講師の指導の成果か、子どもたちはやる気に満ちていました。給食後の休み時間も運動場に出て、さっそく一輪車の練習をする子も。講習がすべて終わった後、児童代表が「初めて一輪車に乗れました。これからも練習を続けます」とあいさつしました。

翌30日は隣の東白川村へ。村立東白川小学校は1980年に3小学校が統合されて出来ました。児童数78人。村は「つちのこ」伝説があり、最近はコロナで中止していますが、毎年「つちのこフェスタ」も開かれます。

前日に続き、講師は佐藤さんと高田さん。この学校では以前から一輪車に取り組んでいる4年生だけが教わります。「14人いる4年生から学校全体に広げていければ」と伊佐治晃校長。さっそく「飛び乗り」や、全員で手をつなぐ「ループ」の技にとりかかりました。みんな、ほとんど休憩も取らず、熱心に指導を受けます。講師からは「上手でできる人と一緒に練習してみると、コツがわかって上達できます」というアドバイスももらいました。

一週間後の12月7日、佐藤さんと高田さんの講師ペアは長野県南相木村の村立南相木小学校へ。会場の体育館に真っ先に入ってきたのが、2人しかいない1年生の新海薫さんと三枝滯央さん。本日の主役です。

「一輪車とけん玉に力点を置き、年間を通して取り組んでいます」と担任の櫻井みさ子先生。講習は、ほぼ2人へのマンツーマン指導。年度末に発表する予定の、音楽にあわせた3分ほどの演技を繰り返し練習します。

講師提案の技も取り入れ、小さな体の2人は息を弾ませながら頑張ります。終わった後、新海さんは「だんだんうまくなってきた」、三枝さんは「発表までにもっと上手になりたい」と話しました。



上から白川町立黒川小、東白川村立東白川小、南相木村立南相木小

# 実験と工作で笑顔がいっぱい

## 岐阜・高山市立岩滝小で理科実験教室

12人の児童が次々と、教室で使う木製の椅子を両手で抱えながら、バタバタと床を鳴らし、体育館に飛び込んでくる。きょうは待ちに待った理科実験教室。

岐阜県高山市立岩滝小学校で11月30日、「NPO法人サイエンスものづくり塾エジソンの会」(華井章裕代表)の6人が登壇しました。教室は、ベルマーク財団のへき地校支援事業のひとつです。

細長い風船「ペンシルバルーン」が子どもたちの頭上に飛び、急に大きく破裂します。「わーっ」「きゃーっ」。何もしないのになぜ? それはゴムを溶かす柑橘系の油を直前にちょっと風船につけるから。さらに、コップからこぼれ落ちない水、手のひらにのせた綿に火をつけると一瞬で消えてなくなる実験などが次々と登場。子どもたちは「なんでこうなるの?」と興味津々です。

一番の見せ場は液体窒素を使った実験。「マイナス196度もあるんだよ」とエジソンの会の華井さんが説明します。そこにつけた白菜は瞬間に凍り、たたくと粉々になってみんなびっくり。子どもたちも次々に凍った白菜を両手で挟み、たたきます。バナナを凍らせてトンカチがわりにしたクギ打ちにも挑戦しました。

教室の後半はものづくり。最初は万華鏡です。キラキラ光る小片やビーズなどを詰め、完成した万華鏡の穴をのぞき込みます。「わー、きれい」。顔と顔がほころびます。ほかにも、キラキラした細長いテープひもを何本もつけて作る「くるくるレインボー」などの工作にも挑戦しました。

教室の最後に子どもたちが感想を披露。笑顔で口々に「楽しかった」「面白かった」を連発しました。



# 「本の帯コン」入賞者決まる

## ベルマーク賞に大阪の山岡みつきさん

キャッチフレーズやイラストで、本を選ぶきっかけをつくる「本の帯」。小学生が児童書に巻く「本の帯」をデザインする大阪子ども「本の帯創作コンクール」(大阪読書推進会、朝日新聞大阪本社主催)の今年度の入賞者が決まりました。17回目となった今回は、13都府県の299校から計1万30点の応募があり、115点の作品が入賞しました。

ベルマーク賞が贈られたのは、大阪府茨木市の市立茨木小学校4年、山岡みつきさん。中学年の課題図書のひとつ、「ラグリマが聞こえる—ギターよびげ、ヒロシマの空に—」(ささぐちともこ著、汐文社)の帯を作りました。広島への原

爆投下の際に爆心地近くで見つかり、後に修復された「被爆ギター」を題材にした児童文学です。「ラグリマ」はスペイン語で「涙」を意味します。

山岡さんの帯には「広島への涙の二重奏」というコピーと「原爆の怖さと音楽の素敵さが分かりました」との感想も記されています。普段からよく本を読むという山岡さん。好きなジャンルは「怖い気持ちになる本」で、図書館に一人で行くこともあるほど本が好きとのことでした。



# ベルマーク仕分け集計 水戸社協で講習会

茨城県水戸市の市福祉ボランティア会館で12月13、20日、市社会福祉協議会(社協)主催のベルマーク仕分け・集計の講座があり、12人の市民が参加しました。13日はベルマークの仕組みや援助内容、作業上の注意などを学習。20日は本物のベルマークで作業し、約1時間で2600点余を集計しました。講師はベルマーク財団から派遣しました。社協では今後、自前で集めたマークを市内の学校に寄贈するためのボランティアサークルを立ち上げたいとしています。



# 財団見学、2年ぶり 「生涯続けたい」

コロナ禍でしばらく途絶えていた財団見学が、約2年ぶりに実施されました。神奈川県相模原市の富成啓子さんが12月27日、娘の市立南大野小学校1年、和葉さんと財団を訪問しました。

「趣味はベルマーク集め」と話す啓子さんは、生涯収集を続けたいと考えているそうです。お子さんが卒業すると学校とは疎遠になりがちですが、公民館を拠点にすれば続けられるのでは、という話になりました。「公民館でサークルのような形で、ボランティアが出来たら生きがいにもなります」と話してくれました。

